

保育実習Ⅲ（施設）実習指導の 効果に関する一考察

古野 誠生¹⁾ ・ 飯塚 恭一郎²⁾

One of consideration about the effect of the guidance of the nurture training judged from a training diary

by

Nario FURUNO ・ Kyoutiro IIZUKA

【キーワード】 保育実習指導、施設実習、実習日誌、子どもの観察 考察

1. はじめに

現在、保育士養成校での実習日誌の記述の仕方において、エピソード記録の形態での記述を推進する養成校もある。そのような状況の中、大多数の養成校においては、一斉保育の記録に適しているような集団に対する記述の実習日誌形態での指導を実施している。

ただ、こうした日誌形態の問題点として小山は「時系列的に一日の流れを追って記録する様式は、保育の流れを理解することは容易であっても、一人ひとりの子どもを捉える視点が育ち難い」(2006)¹⁾と述べている。また石井は、幼稚園や保育所の実習では「部分実習や全日実習が導入されるため、指導案を立案し、『保育者と同様に保育すること』が実習のねらいと意識され、『子ども理解』への関心が薄れてきたものとする。そのため、子ども理解の観点が十分に身につけていなかった学生は子どもの内面を掘り下げることができず、保育者の言葉かけなど視覚的にとらえやすい援助や対応に関心が集中しているものと考えられる」(2014)²⁾と指摘している。実際に、本校における学生の実習日誌の記述においても、子どもの内面をとらえるような観察に至っていないことが多い。

一方、施設実習においては、施設形態にもよるが一斉保育のような実習日誌記述の仕方に向かない活動が多く展開される。児童養護施設や乳児院、知的障害児施設などには、これまでの育成環境の困難さや障害などを持っている為、さらなる配慮が必要な子どもが入・通所しており、そこでの実習日誌記述においては個別的な観察の視点と子どもの心的・内的状況をとらえる能力、記録の仕方が必要となってくる。そこで、実習指導では、子どもの内面をとらえることができるような指導内容が必要となってくる。

受理日 平成 27 年 11 月 30 日

¹⁾ 純真短期大学こども学科 助教

²⁾ 純真短期大学こども学科 准教授

本研究では、現在本学において実施している実習指導の効果を検証するべく、保育士養成のカリキュラムにおいて保育実習Ⅲを選択した学生の実習日誌の「子ども（利用者）の反応・気づき」の内容について分析した。これらの学生は、保育実習Ⅰ、Ⅲと計2回施設での実習を実施する為、一回目の実習日誌（保育実習Ⅰ）と二回目の実習日誌（保育実習Ⅲ）の内容の比較をすることによって、二つの実習の間に実施した実習指導の効果について検討を行うことができる。これらの分析・検討によって、こどもの内面をとらえることができるようになる指導内容を明らかにしていくことを目的とした。

2. 実習事後・事前指導の授業内容について

(1) 対象

本学短大生 2 年生 11 名（保育実習Ⅰ終了後）

(2) 事前・事後指導の全体の内容

①学習プリントの記入によって、保育実習Ⅰでの振り返りを個人で行った。

設問 1. できたこと、良かったこと、自信がついたこと等を書きましょう。
 設問 2. 前回の施設実習で、疑問に思ったことを書きましょう。
 ①支援・援助の方法
 ②子ども・利用者への対応
 ③施設の職員について

②一つの机に円形に集まり、学習プリントに記入している内容を発表し、グループディスカッション形式で、情報の共有や、振り返りを行った。

③提出された実習日誌の中から、教員が抽出したエピソードについて内容を深め、その対応についてグループ毎に話し合った。その後、各グループ毎に話し合った内容を発表した。

④保育実習Ⅲで実習を行う施設についての内容を深める学習を行う。個人で学習プリントを記入しながら、それぞれの施設に必要な知識を学習した。

⑤保育実習Ⅰを踏まえ、学習プリントの記入によって、保育実習Ⅲに向けての課題をそれぞれ持たせ、各自の意見を発表した。

設問 1. 今回の実習での、自分自身の課題は何でしょう。学習を深めたいことは何でしょう。

(3) 子ども（利用者）の反応・気づきの記述についての指導内容

(2)事前・事後指導の全体の内容の③の部分で「子ども（利用者）の反応・気づき」の記述について、重点的に指導を実施した。その為、その内容について、さらに詳しく記述する。

①ある学生の実習日誌の事例について、口頭にて紹介した。

紹介内容は次の三つ

7/24（水）の 子どもの 反応より	悪い事をした時に1対1で話をし、分かるまで時間をさいて、指導する事で、どうして悪いのか理解させる。
--------------------------	---

7/28（日）の 子どもの反 応より	悪いことをした時に、何故いけないかを子どもに問い気づかせる事によって、反省させる
4日めのま とめ	悪いことをした時に、少しずつ注意をしたり、誤って来たり、少しずつ進展したと思えます。

②この内容について、記述した学生にどのような事が悪い事として見做されていたのかを尋ねる

③記述した学生より、次のような例示があった

おもちゃの取り合いになったら、すぐ手がでる、足がでる（暴力行為）
小さい子どもで、ご飯に行かないから、手で引っ張って行くけど、言う事をきかない
「次〇〇するよー」と知らせても、無視して遊ぶとか、言う事をきかないで遊ぶ
施設のルールを守らない

④このような行動をとる子どもを想定して、次のような課題についてグループ毎に話し合い意見をまとめた。

設問 1. その子どもの反抗的態度、粗暴な行為は「悪いこと」なのか 設問 2. その子どもは、「悪いこと」を本当に分かってなくてやっているのか。もし分かっている、それでもやってしまうのは何故か。仮説をたてよう。
--

⑤各グループ毎の意見を発表した。出てきた意見は次のとおり。

<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの反抗的態度は、社会的には悪いが、自分の気持ちを表す手段として考えると悪いと言えない。 ・言葉で伝える事ができないから、粗暴な行為になってしまったりする。 ・悪いことは悪いが、子どもには喧嘩も必要で、喧嘩をして周囲とのかかわりも気づいていけると思う。 ・ダダをこねるというのも、意思を伝えているのだったら、悪いこととは言えない。 ・今まで意思を伝えることができなかつたかもしれないから、どうやって伝えていいかということが全くない。ダダをこねて頑張って自分の意思を伝えようとしていることは大事なことです。 ・怒られることで、職員の注意を引いている。 ・自分が暴力を振るわれて育ってきているから、悪いという認識がない。 ・集団生活でストレスが溜まっているから、ストレスのはけ口として、そういうことをしている。 ・自分の我儘が職員に通るのかを試している。
--

3. 実習日誌の分析による研究の方法

(1) 対象

保育事前事後指導Ⅲを受講した11名のうちの10名分の保育実習Ⅰの日誌（10部）と保育実習Ⅲの日誌（10部）（受講生11名のうち1名は実習を実施しなかった為、10名分の実習日誌の回収となった）

(2) 分析の内容

①実習日誌の「こども（利用者）の反応・気づき」を全抽出

②抽出した項目について、以下に示すカテゴリーに基づき9つに分類を行う。

I : 観察や体験から得られた事実の記録

→実習中の観察や自分自身が体験した事柄の事実の記述がある。

II : 事実に対する感想

→事実に対する感想の記述がある。

III : 施設職員や指導員からの助言やアドバイスによる学び

→施設の職員や指導員から事柄の意味や理由、根拠等の助言・アドバイスをもらい、それによって学んだことの記述がある。

IV : 施設職員からの指示や要請による介助実践や保育実践

→職員からの指示や要請をうけて、施設における仕事を実際に実践したその記述がある。

V : 介助や保育実践による結果の記録

→自分が行った介護実践や保育実践の結果の記述がある。

VI : 観察や体験からの想像、推測、予想、考察

→観察や体験からした事実をもとに自分なりの想像、予想、推察、考察したことの記述がある。

VII : 推察、考察をもとにした実践

→事実から想像、予想、推察、考察したことをもとに実際に介助や保育を実践した記述がある。

VIII : 実践の反省・振り返り

→自分の介助や保育実践の振り返りや反省をした記述がある。

IX : 実践の振り返りのフィードバック

→実践の振り返りや反省を次の実践にフィードバックした記述がある。

なお、すべての記述がカテゴリーごとに分類できないケースもあった。たとえば、「III : 施設職員や指導員からの助言やアドバイスによる学び」という事前の情報提供や予備知識があったうえで実際の場面を観察し、「I : 観察や体験から得られた事実の記録」があったと解釈される記述などは、「I - III」に分類している。また、「I → VI」という分類も設定している。ここには、記述内容はあくまでも「I」であるが、記述された内容を吟味すると観察の着目点は良いがそれを考察に繋げることができていないと解釈されたものを分類している。

実施した実習指導においては、実習で観察したことや体験したことから「考察」ができるようになることを指導のねらいとした。もっとも現実的には、学生にしてみればそうした指導を受けてすぐに「観察」がダイレクトに「考察」に直結して記述ができるわけではない。まず考察の前段階として、実習体験のどこに着目をしてその事実をエピソードとして切り出し、そのエピソードを「考察の入り口」にしていけるかということが重要となってくる。カテゴリーの「I」には「実習中の観察や自分自身が体験した事柄の事実の記述がある」と読み取れるものを分類しているが、その事実を切り出した着目点に、考察の入り口にたどり着いていると捉えることができる記述がいくつかあった。残念ながら考察には至っていないが、単に「I」の段階ではなく、観察する眼が育ってきたと評価できるととらえた。そこで、記述としては「VI」に分類することはできないが、あと一步のところまで「VI」に届くという期待も込めて「I → VI」という分類を設定した。「V → VI」についても同じ考え方による分類となる。

(3)分析の実施

①各学生での実習Ⅰでの日誌と、実習Ⅲでの日誌の比較

実習Ⅲの事前・事後指導で変化したか（数・内容）

②実習日誌の記述の変化で、特徴的な箇所を抽出し、そのような点が変わったかを質的観察によってとらえる。

(4)実習日誌の形式

時間	子ども（利用者）の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども（利用者）の反応・気づき	環境構成・準備

4. 日誌記述の分析結果

(1)学生 A の分析

①カテゴリー分析の結果

学生 A の実習については、保育実習Ⅰ（施設）は、医療型障害児入所施設で実習を実施した。日程は 2015 年 6 月 22 日から 7 月 1 日の 10 日間である。それに続く保育実習Ⅲは、児童養護施設で実習を実施した。日程は 2015 年 8 月 20 日から 8 月 29 日の 10 日間である。

この学生 A が上記 2 回の実習で記述した日誌について、項目にある「子ども（利用者）の反応・気づき」の記述内容を、2. 方法で提示した分類カテゴリーに当てはめて分析を試みた。以下の表がその結果である。

表 1. 保育実習Ⅰ実習日誌のカテゴリー分析結果

カテゴリー	記述数
I	40
I → VI	5
Ⅲ	6
Ⅲ - I	6
V	13
VI - I	1
記述総数	71

表 2. 保育実習Ⅲ実習日誌のカテゴリー分析結果

カテゴリー	記述数
I	29
I - VI	8
I → VI	21
Ⅲ - I	1
V	5
V - VI	2
記述総数	66

保育実習Ⅰと保育実習Ⅲの日誌記述内容を比較して、変化していることとしては「Ⅰの記述数が減った」「Ⅰ - VIとⅠ → VIの記述が増えている」ということがあげられる。これは、保育実習Ⅲになると、単に観察や体験の事実の記述が減り、事実の背景にある根拠や利用者や子どもの言動の裏にある心情等を考えていこうという意識が強くなっていると結果と解釈できる。「Ⅰ → VI」の記述については、そうした考察に届く記述にはなっていないものの、目の前の事実を「考察の入り口」として着目する力が付いてきていると評価できるものである。これも大幅に増えている。

また「Ⅰ - VI」に分類される記述が、保育実習Ⅲの日誌で初めて 8 箇所確認された。こ

これは事実を前にしてその場で自分なりに考察を巡らせた記述になっているもので、これだけでも「考えながら実習をして何かを学ぶ」という姿勢が身についてきているといえる。また、この「Ⅰ－Ⅵ」に分類された記述のうち、文末を「～印象的だった」と結んでいるものが3箇所あった。どう印象的だったのか具体的記述がないため考察とは言い難いものの、事実を捉えるにあたり、なにか学びに通じる意味があるものとして印象に残していこうとしていると解釈できる。このように、実習事例から考察に至る力が確実に向上してきていることが伺える結果となっている。

②各カテゴリーに分類された記述の例示

次に、各カテゴリーに分類された記述をそれぞれ例示する。なぜ、そこにカテゴライズしたかの理由も述べる。

ア. カテゴリーⅢ（保育実習Ⅰ／1日目）

時間	子ども（利用者）の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども（利用者）の反応・気づき	環境構成・準備
	◎入浴 ・着衣をする。	○●身体に傷やあざなどがな いか確認しながら、着衣 を手伝う。	拘縮のある利用者さん は、拘縮の強い方から衣 服を着るようにする。	

利用者の入浴時の着衣の場面である。実際には着衣の手伝いを行っていると思われるが、拘縮のある利用者への着衣介助のコツが記述されている。おそらく施設の職員から助言を受けた介助技術と思われるが、利用者の様子ではなく、このコツの説明が記述内容となっている。

イ. カテゴリーⅢ－Ⅰ（保育実習Ⅰ／1日目）

時間	子ども（利用者）の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども（利用者）の反応・気づき	環境構成・準備
	◎口腔ケア ・歯磨きをする。	○●むし歯予防など衛生管理 のため、歯ブラシ、コッ プ、おしぼりを用意し口 腔ケアを行う。	食物を噛まないことによ り口内が退化し歯並びが 悪くなってしまっていた り、溝が深くなっている 利用者さんもおられた。	・歯ブラシ ・コップ ・おしぼり

歯磨きの介助を主とした口腔ケアの場面である。歯並びが悪かったり溝が深くなっている利用者の観察事例が記述されているが、ここにはそうなった原因が書かれている。おそらく施設の職員からそうした説明を事前なり事後なりに受けたと思われる。職員から得られた情報や学んだことを観察事例の裏付けとして記述されている。

ウ. カテゴリーⅠ（保育実習Ⅰ／1日目）

時間	子ども（利用者）の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども（利用者）の反応・気づき	環境構成・準備
	◎昼食	○●利用者さんを見守り、必 要に応じて声掛けや食事 介助を行う。	ご飯をおいしそうに食べ ている方がおられた。	

利用者の食事の様子を記述した内容となっている。実際には声掛けや介助を行っていると思われるが、記述内容としては事実のみが描写されている。

エ. カテゴリーV (保育実習 I / 5 日目)

時間	子ども (利用者) の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども (利用者) の反応・気づき	環境構成・準備
	◎自由活動	○●利用者さんを見守り、話しかけたり、スキンシップをとり、コミュニケーションをとる。	こちょこちょをすると顔を実習生の方へ向け、笑顔を見せてくれた。	

自由活動時の場面である。スキンシップの意図があったと思われるが、「こちょこちょをする」という利用者に対して実習生自ら行った保育実践の様子が描写されており、加えて利用者の様子も記述されている。

オ. カテゴリーIV - I (保育実習 I / 9 日目)

時間	子ども (利用者) の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども (利用者) の反応・気づき	環境構成・準備
	◎自由活動	○●利用者さんを見守り、声掛けをやスキンシップをし、楽しむ。	利用者さんの中で機嫌があまり良くない方がおられ、他傷行為や大声を上げている姿が見られた。	

ここで記述されているのは他傷行為や大声を上げる利用者の様子である。だが、その観察事例記述の前に「機嫌が良くない利用者がいるようだ」という実習生なりの推測や予想をしていることが読み取れる。利用者の他傷行為や大声という様子を先に見て、利用者の「機嫌」という要因を想像したということも考えられるが、この記述だけでは判断が難しい。ここでは、「利用者の様子がいつもと少し異なる」という雰囲気を感じたうえで、こうした利用者の行為を観察事例として捉えた記述と解釈した。

カ. カテゴリー I - VI (保育実習 III / 4 日目)

時間	子ども (利用者) の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども (利用者) の反応・気づき	環境構成・準備
	◎朝食 ・手洗い ・席に着く ・朝食	○●楽しく食事が出来るよう会話を楽しみながら、食事を一緒にとる。	納豆が好きなお子が多いようで、今日はたくさん納豆があるよと嬉しそうに話していたのが印象的でした。	

朝食の場面である。食事をしながら子どもと交わした「納豆」を話題にした会話の様子から「納豆好きのお子が多い」と推測をしていることが記述から伺われる。

キ. カテゴリー V - VI (保育実習 I / 4 日目)

時間	子ども (利用者) の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども (利用者) の反応・気づき	環境構成・準備
	◎順次起床 ・起床 ・挨拶	○起きてきた子どもたちに挨拶の習慣をつけるため朝の挨拶をし、一人一人に声を掛ける。	朝からあまり機嫌が良くなかったのか、おはようと挨拶すると、パーカ！おねえちゃんなんか嫌い！と反抗的な態度を示した。	

起床時の挨拶の場面である。実習生から朝の挨拶をすることで子どもに対してかわりを持とうとしているが、反抗的な態度を返されている。そうなった原因を「機嫌の悪さ」と解釈しているが、単に挨拶のやりとりがうまくいかなかった、暴言を吐かれたという事実の記述に終わることなく、その子どもの心情を汲み取ろうとする姿勢が記述から感じられる。

ク. カテゴリー I → VI (保育実習 I / 6 日目)

時間	子ども(利用者)の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども(利用者)の反応・気づき	環境構成・準備
	◎自由活動 ・おもちゃ遊び ・戦いごっこ ・ままごと遊び ・絵本 ・テレビ鑑賞	○●子どもたちが好きなおもちゃで遊べるよう見守り、また、くつろげる空間作りをする。 ○●遊びを一緒に楽しみ、発展できるようにしたり、友だちと仲よく使えるよう援助を行う。	男の子は戦いごっこを女の子はぬり絵やおもちゃ遊びをする様子が見られた。 戦いごっこをしていた子どもがついつい力を入れすぎてしまう様子もあった。	

自由活動の時間、いわゆる自由遊びの場面である。「男の子は戦いごっこ」「女の子はぬり絵やおもちゃ遊び」といった具合に、自由活動の詳しい様子の記述がある。加えて、戦いごっこがエスカレートするとトラブルや喧嘩に発展しかねないことも遊びの観察から言及している。しかし、その背景や子どもに心理にまで考察が踏み込めていない。遊びの場面は、子どもの欲求や心の内面に迫っていくには格好の機会であり、考察する手がかりがこの記述の様子からはいくつも拾えると考えられるが、残念ながらそこまでの考察を記述に至っていない。

(2) 学生 B の分析

① カテゴリー分析の結果

学生 B は、保育実習 I (施設)、保育実習 III 共に児童養護施設で実習を実施した。保育実習 I の日程は 2015 年 7 月 21 日から 7 月 30 日の 10 日間である。それに続く保育実習 III の日程は 2015 年 8 月 20 日から 8 月 29 日の 10 日間である。

この学生 B が上記 2 回の実習で記述した日誌について、項目にある「子ども(利用者)の反応・気づき」の記述内容を、「2. 方法」で提示した分類カテゴリーに当てはめて分析をした。以下の表がその結果である。

表 3. 保育実習 I 実習日誌のカテゴリー分析結果

カテゴリー	記述数
I	11
I → VI	8
V - II	1
V → VI	1
記述総数	21

表 4. 保育実習 III 実習日誌のカテゴリー分析結果

カテゴリー	記述数
I	12
I - VI	5
I → VI	9
V	1
V - VI	2
記述総数	29

保育実習 I と保育実習 III の日誌記述内容を比較して、変化していることとしては「I - VI と V - VI の記述が出現した」ということがあげられる。二つあわせて 7 箇所であった。保育実習 I では、VI の記述が全く確認されなかったが、保育実習 III では、VI の記述をすることができる力がついてきたと考えられる。

② 各カテゴリーに分類された記述の例示

次に、特徴的な記述をそれぞれ例示する。

ア. カテゴリーV-II (保育実習I/2日目)

時間	子ども(利用者)の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども(利用者)の反応・気づき	環境構成・準備
15:00	・おやつを食べる ・おやつを食べ終わったら自由に過ごす	●コップに牛乳を注ぎ、おやつを渡す ○●子どもたちと一緒にテレビをみたり、おもちゃであそんだりする	・帰る時に「また明日ね」と声をかけるとさっきまで仲良く遊んでいたのにバカ等を言われ、どのように対応したいのか戸惑った	

■2日目のまとめの記述より

食事の時等子どもから「どっか行って」と言われた時や帰る時に「もう帰るね。また明日来るね」と言うと、さっきまで仲良く遊んでいたのに「バカ」等言われてどのように対応したらいいのか悩みました。

子どもの「バカ」等のような拒否的な言葉に対して、「どのように対応したらいいのかわからない」との結論に留まっている。子どもの心情の推察、それに対しての実習生の対応についての考察がない。

イ. カテゴリーI (保育実習I/4日目)

時間	子ども(利用者)の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども(利用者)の反応・気づき	環境構成・準備
	・自由に過ごす	●子どもたちの布団を片づける ●トイレ掃除をする ○●子どもたちに声かけをしながら楽しい雰囲気テレビを見る	・喧嘩をして相手の子を噛んでしまう子がいた	

困った行動が起きた事に関する記述のみであり、その前後の出来事や、何故その行動が起きたのかの考察がない。

ウ. カテゴリーI→VI (保育実習I/5日目)

時間	子ども(利用者)の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども(利用者)の反応・気づき	環境構成・準備
14:50	・おやつを食べる	○●おかしの袋を開けたり、「おいしいね」など声をかけたりする ○おやつを食べ終わった子どもから検温をする	・おやつを実習生や職員にわけると子どもがいる	

自分のおやつを他の子どもや職員に分ける子どもがおり、その行動に対する実習生の思い(自分のおやつを他人にあげることでできる子どもがいるんだ等の驚き)があり、ピックアップしたと考えられるがそのことについての記述がない

エ. カテゴリーI-VI (保育実習III/1日目)

時間	子ども(利用者)の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども(利用者)の反応・気づき	環境構成・準備
9:00	・登園 ・自由活動	○登園する子どもをお見送りする ●洗濯するシーツを取り、布団をたたんで片付ける	・シーツを洗濯機まで持って行く。時より実習生を呼び自分がどれくらいシーツを持っているのか見せていたの、ほめてほしいの、だろうと思った。	

子どもの様子を観察し、子どもの心情を推察した。ここでは記述されていないが、シーツを持っている子どもを褒めたのだろうと考えられる。

オ. カテゴリー I - VI (保育実習Ⅲ / 2 日目)

時間	子ども (利用者) の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども (利用者) の反応・気づき	環境構成・準備
	・登園 ・自由活動 ・昼食	○登園する子どもをお見送りする ○●一緒にテレビを見たり、おもちゃで遊んだりする ○おもちゃで遊んだ後は片づけるように声をかける	・テレビから流れてくる歌を歌ったり、ダンスを踊ったりする姿がある ・お片付けをしようねと声をかけるとしていることを中断して片づける姿がある	

■ 2 日目のまとめ記述より

子どもの反応をみながら声かけや子どもと接してみました。この声かけや接し方は子どもが嫌がっていないかなと子どもの様子を観察しました。また、なぜこのような行動をするのかと考えるようにもなりました。

「ア. カテゴリー V - II (保育実習 I / 2 日目)」のまとめの記述にもあるように、児童養護施設の子どもに対して、実習生が声かけをすると、子どもから「拒否」や「無視」などをされることがある。その為、実習生自身の支援についての子どもへの反応の記述がされている。この場面では、拒否されずに次の場面 (昼食) にスムーズに誘導できたようである。しかし、この場面で次の活動にスムーズに誘導できたのは何故かまで考察することができれば、「拒否」や「無視」されないような声掛けができるようなヒントを得られた可能性がある。

カ. カテゴリー V - VI (保育実習Ⅲ / 6 日目)

時間	子ども (利用者) の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども (利用者) の反応・気づき	環境構成・準備
12:00	・昼食	○●一緒に会話をしながら楽しい雰囲気でする ○野菜を食べない子どもには、口元に野菜を運び食べるように促す	・野菜を自ら食べている子どもに「すごいね」と声をかけると「見ないで」と言われまだ信頼関係がそこまでできていないのかもしれないと思った	

実習生の声かけに対する子どもの反応を記述している。「見ないで」との反応があり、実習生が期待した子どもの反応ではなかった為、何故なのか考えた。

■ 保育実習 I / 7 日目のまとめ記述より

子どもの伝えたいことに気付けるようにしました。子どもが言っていることはしっかりと耳を傾けたり、子どもたちが私にした行動にはどのような意味があるのか考えたりしました。子どもの気持ちを全て理解するのは難しいけど、少しは理解して気持ちに寄り添えたらいいと思います。

■ 保育実習Ⅲ / 実習総括の記述より

職員さんの行動や声かけを観察したり、反省会の時に質問をしたりして子どもたちにどのようにして声かけをすればいいのか学ぶことができました。子どもたちの行動に隠された気持ちを考察し、このときどのようにしたらいいのか質問をして、それを参考に行動することで子どもの気持ちに寄り添うことができました。

一回目は「子どもたちが私にした行動」について限定していたものが、二回目では、「子どもたちの行動」と観察の視点が広がった。さらに、子どもの行動について、考察するだけでなく、その後の実習生の行動が記述に加わった。

一回目、二回目に共通することは、一斉保育の際に適するような実習日誌の記述の仕方

をしていた。その為、個別的な視点での子どもに対する記述ができていない。その中でも、一回目の実習では「～する子どもがいた（いる）」という記述が、二回目の実習では「～する姿がある」に変化した。

(3) 学生 C の分析

① カテゴリー分析の結果

学生 C の実習については、保育実習 I（施設）は、障害福祉サービス事業所（生活介護）で実習を実施した。日程は 2015 年 7 月 6 日から 7 月 17 日の 10 日間である。それに続く保育実習 III は、障害福祉サービス事業所（就労移行支援 B 型、自立訓練）で実習を実施した。日程は 2015 年 8 月 17 日から 8 月 29 日の 10 日間である。

この学生 C が上記 2 回の実習で記述した日誌について、項目にある「子ども（利用者）の反応・気付き」の記述内容を、「2. 方法」で提示した分類カテゴリーに当てはめて分析してみた。以下の表がその結果である。

表 5. 保育実習 I 実習日誌のカテゴリー分析結果

カテゴリー	記述数
I	37
I - VI	16
I → VI	1
V - VI	1
記述総数	55

表 6. 保育実習 III 実習日誌のカテゴリー分析結果

カテゴリー	記述数
I	13
I - VI	20
III - I	1
V - VI - VII	2
V - VI	5
V → VI	1
記述総数	42

保育実習 I と保育実習 III の日誌記述内容を比較して、変化していることとしては「I の記述数が減った」「I - VI の記述が増えている」「V - VI の記述が増えている」「V - VI - VII の記述が出現した」ということがあげられる。これは、保育実習 III になると、単に観察や体験の事実の記述が減り、事実の背景にある根拠や利用者や子どもの言動の裏にある心情等を考えていこうという意識が強くなっていると結果と解釈できる。「V - VI が増えている」ことに関しては、学生自身が実践する機会と自ら実践する意欲が増加したからかもしれない。「V - VI - VII」の記述については、二箇所確認された。学生自身が実践し、子ども（利用者）の反応から得られる情報から考察し、直後の子ども（利用者）への声かけなどの実践につなげることができた。

② 各カテゴリーに分類された記述の例示

次に、特徴的な記述をそれぞれ例示する。

ア. カテゴリー I → VI（保育実習 I / 3 日目）

時間	子ども（利用者）の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども（利用者）の反応・気づき	環境構成・準備
9:20	◎送迎車到着 ・支援員や実習生と挨拶をする ・車の座席から車椅子へ移動する	○利用者とは挨拶を交わしながら表情をみる ○座席から車椅子に乗り換えるよう支援する	・眠たそうな顔をしていた利用者が、支援員の顔を見た時に笑顔を見せた	

送迎車で利用者が登園した直後の場面である。眠たそうな顔をしていた利用者が、支援員の顔を見て笑顔を見せた。この場面を切り取った学生は、利用者と支援者との良好な関係（信頼関係）について気づくことができたが、それに対する記述はなかった。

イ. カテゴリー I - VI (保育実習 I / 6 日目)

時間	子ども（利用者）の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども（利用者）の反応・気づき	環境構成・準備
10:20	◎グループでの朝礼 ・パートナーフォーを押す	○パートナーフォーに声を吹き入れる ○パートナーフォーを押すように促し、支援する	・周りに誰もいない利用者の方がとても悲しそうな表情をした。近くに支援員が行くと表情が戻った。その事から、寂しかったのだと考える	・パートナーフォー ・テーブル

朝礼での場面。朝礼の当番の利用者が、コミュニケーション支援機器（パートナーフォー）を使用して、司会を進めている。その場面での、ある利用者の観察をしている。支援員による対応についての、利用者の反応と、そのことから、考えられる利用者の心情について考察した。

ウ. カテゴリー V - VI (保育実習 III / 2 日目)

時間	子ども（利用者）の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども（利用者）の反応・気づき	環境構成・準備
	・給食を受け取り座る ・支援者や周りの利用者と会話をしながら食べる	○●食べながら会話をし、コミュニケーションを図る。 ○話をし過ぎている利用者にご飯も食べるように伝える ●食べずに立っている利用者「どうしたのですか」と声を掛けた。機嫌が悪そうに「あっち行け」と言われた。	・タイミングが悪かったのか。機嫌の悪い時だったのかと思う。	

昼食場面である。気になる利用者へ実習生が声かけをしたが、「あっちに行け」と言われた。その為、「声かけのタイミングが悪かった」のか、「何かしら機嫌が悪くなることがあったのか」と利用者についての考察を行った。

エ. カテゴリー I - VI (保育実習 III / 3 日目)

時間	子ども（利用者）の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども（利用者）の反応・気づき	環境構成・準備
	◎昼食 ・各自、食事の挨拶をして食べ始める ・他の利用者や支援員と会話を楽しむ	○●食べながら会話をし、コミュニケーションを図る。		

	<ul style="list-style-type: none"> ・各自食後の挨拶をし、食器を片づける ・和室で他の利用者や実習生と会話を楽しむ ・実習生の問い掛けに応えながらクラブ活動の話をする 	<ul style="list-style-type: none"> ●好きな歌手や趣味についての会話をし、コミュニケーションを図る ●午後のクラブ活動のことに ついて問い掛け、意欲が湧くように導く 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きな話をしている時と他人の話を聞いている時の表情や声の大きさが違った。他人の話は流すように聞き、自分の話を聞いて欲しいという様子であった。
--	---	---	--

昼食後の休憩時に利用者とコミュニケーションしている場面である。実習生と歌手や趣味についての会話をしている。会話時の利用者の反応を観察し、実習生の話の内容よりも、利用者が自分の話を聞いて欲しいという様子であるという気づきをした。その為、利用者自身が話しやすいような内容に会話の流れを導いた。

オ. カテゴリーV－VI－VII（保育実習Ⅲ／9日目）

時間	子ども（利用者）の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども（利用者）の反応・気づき	環境構成・準備
12:55	<ul style="list-style-type: none"> ・各作業室で利用者同士での話を 楽しむ ・和室でテレビを見ながら体を休 める ・廊下で一人で座る ・作業室に戻る 	<ul style="list-style-type: none"> ●会話に加わりコミュニケーションを図る ●一人でいた利用者の方に一 緒に側にいて良いか問い掛 ける 	<ul style="list-style-type: none"> ・一緒にいて良いか問い 掛けたら、反応がなか った。しかし、どいた 方が良いか問い掛け たら首を横に振った。一 緒にいる時も嫌な顔せ ず、楽しそうな表情だ った。 	

気になる行動をとっている利用者に対して、実習生が声かけを行った場面である。自身の声かけに対する利用者の反応によって、実習生自身の支援についてどうすべきか判断することができた。

5. 検証と考察

3名の学生の実習日誌記述内容の分析結果に共通していることがある。それは、実習体験や観察をもとに考察をしていく力が微々たるものではあるが着実に伸びてきているという点である。これは記述内容の変化から明らかである。またこれは保育者を目指す学生の専門性の力量が形成され成長している証しでもある。ただ、この成長と施設実習の事前・事後指導の学びとの因果関係を証明したものではない。そこでこの点を検証すべく3名の学生にインタビューを行った。質問は以下の3つである。

- Q1: 保育実習Ⅲの実習日誌を書くにあたって心掛けていたことは何ですか？
- Q2: 実際に心掛けていたように書けましたか？
- Q3: 8月の事前指導の授業は保育実習Ⅲの日誌記述をするのに役立ちましたか？

インタビューの回答の中で3名に共通していた内容は「1日のタイムスケジュールと観察した出来事を記憶にとどめ、それを日誌に書き込んでいくことで精一杯だった」「観察事例から深く考察することは意識になく、それよりも何をしたか、何をしていたかを思い出して書くことが優先だった」「(自己評価として)日誌が適切に記述できたという手応えはない」「事前指導の学びが直接保育実習Ⅲの日誌記述に役に立ったという実感はない」という

ものであった。つまり学生本人にとっては、観察から考察をして、意識的に日誌記述をしたという実感が無いようである。それよりもその日の体験・出来事を記録することに注力していたことがうかがわれる回答だった。つまりこの回答からすれば、事前・事後指導の学びは効果がなかったということが結論づけられる。

しかし日誌記述の分析から、目の前の事実を「考察の入り口」として着目する力がついてきているのは明らかである。考察に結びつく「子どもや利用者を見る目」が確かなものになっている。ではその育ちを促していったものはいったい何なのか疑問が残る。

一般的には、実習全体のあらゆる体験や実習先の職員や保育者からの助言、アドバイスによって育ちが後押しされ、そして学生自身の努力によってその力をつけていったということが考えられる。ただ一方で、そこに大学の授業や実習指導による学びがまったく反映されていないということも考えにくい。現場での実習から専門性を学び取っていくそのベースになるものは、大学での保育士課程による学習のはずである。そうしたことからインタビューの回答を考察すると、大学での学習で得た知識や技能が、学生の中で明快に意識化されて実習に取り組んでいたのかどうかということが問題として浮かびあがってくる。これについては、いっそうの研究と吟味を進める必要があるように思われる。

今回の研究では、学生の保育者に求められる力量と専門性を身につけていく成長を確認することはできたが、そのための実習指導の効果と因果関係は確認できなかったという結果になった。しかしこれにより次の研究課題と、現実の問題としての実習事前事後指導にかかわる改善の糸口も見えてきた。今後も地道に実習日誌を軸とした効果ある事前事後指導のあり方について研究、考察を進め指導の改善を図っていきたい。

引用文献

1. 小山祥子 (2006) 幼児理解と保育者の援助理解を深める保育記録に関する研究 (II) —エピソード記録型実習日誌の効用と課題— 北陸学院短期大学紀要, **38**, 99-113.
2. 石井美和・狩野奈緒子・坂本真一・柴田千賀子 (2014) . 子ども理解を深めるための実習記録の活用—エピソード記録の活用の実践— 桜の聖母短期大学紀要, **38**, 65-77.

参考文献

1. 井口眞美 (2012) 保育者養成校における実習日誌に関する指導法の研究—幼稚園実習日誌に用いられる“時制”についての調査から— 淑徳短期大学研究紀要, **51**, 109-125.